

# 言語から見た「白」の世界

## — 朝鮮語と日本語を比較して —

呉 満

### 目 次

1. はじめに
2. 朝鮮民族の「白」に対する認識
3. 日本民族の「白」に対する認識
4. おわりに

### 1. はじめに

ある民族の思想性は、どれか1つの部門が同一の形式により検討すべきものではなく、多方面から、さらに細分化された諸要素に沿って透視された対象を通じて抽出、検討されねばならない、と考える。一民族、一国家の言語とは、まさにその集団とともに生成発展してきた有形無形の歴史所産であるが、それらの中には、その言語を使用する民族の美意識、性向、価値評価の基準など、全ての思想性が融合されていると考えることができる。

また、個別言語は、その生成と発展変化に特有な性格があり、複雑で多様な生成過程の様相を簡単に述べることは困難である。そこには個別言語を生成発展させてきた民族特有の、ある

精神作用が介在していると判断されるからである。

本論では、色彩語の「白」を中心にして、朝鮮民族の物の見方・考え方を、日本民族の「白」に対する認識との対比で考察してみようとするのがねらいである。

### 2. 朝鮮民族の「白」に対する認識

現代朝鮮語で形容詞「白い」を表す語を／hūda／と言うが、その意味は①光が目の色のようだ②光線が全て反射して白く現れる、である。<sup>(1)</sup>

古来より、朝鮮民族を称して「白衣民族」と称するが、朝鮮民族が衣服に白色を尊んだことは頗る古く、『三国志』東夷傳に夫餘人が白衣を着用していたとの記録から知ることができる。<sup>(2)</sup>

白色は北方民族が一般的に尊んだようで、中央アジア地方で発掘された紀元1世紀頃の遺物にも朝鮮民族と同じ白色の衣服の物が見える。北方民族、おそらくはツングース民族の白色は衣服材料に起因しているようだ。即ち絹布と麻布を材料に使用したことで、自然に白色の衣服

(1)『標準国語辞典』シンギチョル・シンヨンチョル共著、乙酉文化社、1958年参照

(2)『三国志』30、『魏書』30、『烏丸東夷傳』第30、『夫餘傳』「在國衣尚白」参照

を多く着用するようになったのであろう、と思われる。<sup>(3)</sup>

朝鮮民族は今もなお、父母の喪に服する時、色に染まった服を脱ぎ捨て、全ての名誉と世俗を捨てひたすら子としての誠の礼儀と道理を捧げるために白衣を着用する。

元来、「희다」/hiida/（白い）は、中期朝鮮語の「히다」/heida/（白い）に遡及することができ、文献上、その異形態の「세다」/sjedā/（白い）、「하야키다」/hajaheda/（白い）、「허여키다」/hojcheda/（白い）を知ることができる。

센 할미톨（蟠蟠老嫗）〈용19〉

머리 세득룩 서르 브리디 마저（自首不相棄）  
〈杜초 16:18〉

흰 므지게 희예 빼니이다 〈용50〉

物이 하야키야（物白）〈杜초 8:53〉<sup>(4)</sup>

一方、中期朝鮮語に、「히」/hei/（日）が散見できることから、「히다」/heida/（白い）は、日および太陽を意味する「히」/hei/に接尾辞「-다」/-ta/が添加し、太陽の明るい属性を表現したものだと考える。日や太陽を意味する「히」/hei/の母音が変化、派生して種々の分化が生じ、音声象徴に従った表現感覚の異形態が生じたものであろう。

中期朝鮮語および方言と音韻の変遷上、「히」/hei/と「시」/sei/および「세」/sje/を知ることができるが、これは「入の舌」/sのh/交替が一種の摩擦音を起しやすい硬蓋音化現象によるものである。現代朝鮮語による「날이 센다」/nali senda/（陽が白む）、「날이 시다」/nali shida/（眩しい）という時の

「시」/sei/系の分布は太陽を中心とする意味の有縁性を示していると言えよう。このように、「히-」/hei-/が分化する過程で、「하-、허-、해-」/ha-、ho-、he-hii/などの異形態があり、「시-」/sei-/系は今も方言で語の命脈を継いでいる。

(1)「하-、허-、해-」/ha-、ho-、he-/系分化形態の語彙を挙げれば次のごとくである。

- ①하얗/hajaj/n. 白、白いこと
- ②하얗다/hajatha/a. 白い
- ③하얘지다/hajedjida/v. 白くなる
- ④허엿다/hojotha/a. 真っ白い
- ⑤허예지다/hojedjida/v. 白む、白ける
- ⑥해거름/hægörim/n. 日暮れ
- ⑦해거리/hægöri/n. 隔年
- ⑧해겇/hekköt/n. 陽が沈む時まで、陽暮れまで。
- ⑨해끄므레하다/hekkimirehada/a. 色が整っていて薄い
- ⑩해끔하다/hekkimhada/a. 色がきれいでやや薄い
- ⑪해끗해끗/hekkithekkith/adv. a. 白色がまばらなさま、点点と白いさま
- ⑫해답작하다/henaptjakhada/a. 顔色が白くて平べったい
- ⑬해넘이/henömi/n. 日没、日暮れ
- ⑭해님/henim/n. お日様、おてんとさま、太陽
- ⑮해동갑/hedonggap/n. 陽が暮れるまでの間
- ⑯해돋이/hedodji/n. 日の出、有り明け
- ⑰해뜰발긔/hettikpalgik/adv. 白みがかったいるさま

(3)『韓國文化史大系I』高麗大学校民族文化研究所刊、1964年、352ページ参照

(4)徐在克『中世国語의 単語族研究』啓明大学校出版部、103ページ参照

(2)「회-」/hŭi- /系分化形態の語彙を挙げれば次のごとくである。

- ①회끄무레하다/hŭikkŭmurehada/a.白みが  
かっている
- ②회끈거리다/hŭikkŭngŭrida/v.目まいが  
する
- ③회끔하다/hŭikkŭmhada/a.白っぽくてきれ  
いだ
- ④회끗거리다/hŭikkŭtkŭrida/v.目がくらむよ  
うだ
- ⑤회끗회끗/hŭikkŭthŭikkŭt/adv.点々と白い
- ⑥회넓적하다/hŭinoptŭjŭkhada/a.顔色が白く  
て平たい
- ⑦회디회다/hŭidihŭida/a.ひじょうに白い。  
真っ白い
- ⑧회땀다/hŭittŭptta/a.見栄を張っている。  
気前がよい
- ⑨회땀거리다/hŭittŭkkŭrida/v.目まいがする。  
くらくらする
- ⑩회땀회땀/hŭittŭkhŭittŭk/adv.白点がちらほ  
らと見えるさま
- ⑪회맑다/hŭimakta/a.白く澄んでいる
- ⑫회멀정다/hŭimŭlŭgŭtha/a.顔色が白くて澄  
んでいる
- ⑬회멀끔하다/hŭimŭlkkŭmhada/a.白く清い
- ⑭회멀썩하다/hŭimŭlssŭkhada/a.顔色が白く  
て澄んでいる
- ⑮회몹다/hŭimukta/a.青白い
- ⑯회번덕거리다/hŭibŭndŭkkŭrida/v.目をぎ  
らぎらさせる
- ⑰회번드르르하다/hŭibŭndŭrŭrhada/a.白く  
てつやつやしている
- ⑱회번들하다/hŭibŭndŭlhada/a.白くてつや  
つやしている
- ⑲회번주그레하다/hŭibŭndŭjŭgŭrehada/a.顔  
色が白くてややきれいだ

- ⑳회번지르르하다/hŭibŭndŭzirŭrhada/a.顔色  
が白くてつやつやしている
- ㉑회부엌다/hŭibujŭtha/a.白くて濁っている
- ㉒회불그레하다/hŭibulŭgŭrehada/a.色が白く  
て赤みがかかっている
- ㉓회붐하다/hŭibumhada/a.夜が明けて薄明  
るい
- ㉔회번하다/hŭibŭnhada/a.白みがかかしてい  
る。ほの白い
- ㉕회읍스름하다/hŭiŭpsŭrŭmhada/a.白みがか  
かってほの白い

(3)「새-」/sae /系は「새-」/sae- /に分  
化、派生し‘新しさ’の意味を表出する。また、  
造語上、複合名詞を形成する場合は冠形詞(連  
体詞)の機能をもつ。例語を挙げれば次のご  
とくである。

- ①새다/seda/v.陽が白む。夜が明ける
- ②새로/sero/adv.新しく。新たに
- ③새달/sedal/n.来月。翌月。次の月
- ④새말/semal/n.新語
- ⑤새물/semul/n.新物
- ⑥새봄/sŕbom/n.新春
- ⑦새사람/sesaram/n.新人
- ⑧새살림/sesalrim/n.新世帯
- ⑨새색시/seseksi/n.花嫁。新妻。新婦
- ⑩새양복/sejaŭbok/n.新しい洋服
- ⑪새얼굴/sŕlgul/n.新顔。新人
- ⑫새집/sedŭip/n.新居。新しい家
- ⑬새서방/sesŭbaŭ/n.花婿。新郎
- ⑭새싹/sessak/n.新芽
- ⑮새댁/sedŕk/n.新居。新しい家
- ⑯새임/seim/n.新たな愛人
- ⑰새벽/sebjŕk/n.暁。夜明け。明け方
- ⑱새뜻하다/settŭthada/a.新しくさっぱりし  
ている。さっぱりとすがすがしい

(4)「세-」/sje/系は、「세-」/se:-/の異形態に分化するが、これは「해」/hε/(日・陽・年)の意義素が数を数える意味に転化したものである。なお、「셈」/sem/は「세다」/se:da/の語幹「세」/se/に名詞形接尾辞「-m」/が後接して転成名詞となったものである。

例語を挙げれば次のごとくである。

- ①세다/se:da/v.数える
- ②셈/sem/n.計算.数.算数
- ③셈나다/semnada/v.物心がつく.分別をわきまえる
- ④셈치다/semtjida/v.計算する.教える
- ⑤셈판/semphan/n.物事の事情.訳
- ⑥셈퍼이다/semphjida/v.暮らし向きがよくなる.ふところが暖まる

(5)「시-、새-、셋-」/shi-,se-,set-/は強調の機能を有する接頭辞であるが<sup>(5)</sup>、これは上述の(3)の「시-」/sei-/系が分化した異形態であろう。特に、色彩語の形容詞に先行して語構成の機能を果たす。例語を挙げれば次のごとくである。

- ①시퍼렇다/shiphorɔtha/a.真っ青だ
- ②시꺼멓다/shikkomɔtha/a.真っ黒い
- ③시꺼매지다/shikkomɛdzida/v.真っ黒くなる
- ④시누렇다/shinurotha/a.真っ黄いだ
- ⑤시누래지다/shinuredzida/v.真っ黄いろくなる
- ⑥시빨겉다/shippalgɔtha/a.真っ赤だ
- ⑦시허옇다/shihojɔtha/a.真っ白だ

(5)「시-」/shi-/は、色の濃いことを表す接頭辞であるが、「시킨드러지다」/shigondrɔdzida/(小生意気だ、こしゃくだ)、「시킨방지다」/shi-

- ⑧새말깁다/semalgatha/a.真っ白で清い
- ⑨새말개지다/semalgɛdzida/v.真っ白で清くなる
- ⑩새빨깁다/seppalgatha/a.真っ赤だ
- ⑪새빨개지다/seppalgɛdzida/v.真っ赤になる
- ⑫새뽕얇다/seppojatha/a.色が鮮やかに灰色がかっている
- ⑬새뽕애지다/seppojedzida/v.鮮やかに灰色がかかる
- ⑭새파랗다/sepharatha/a.真っ青だ
- ⑮새하얇다/sehajatha/a.真っ白だ
- ⑯새하애지다/sehajɛdzida/v.真っ白になる
- ⑰새노래지다/senoredzida/v.真っ黄色になる
- ⑱셋까맣다/setkkamatha/a.真っ黒い
- ⑲셋노랗다/setnoratha/a.真っ黄色い
- ⑳셋빨깁다/setppalgatha/a.真っ赤だ
- ㉑셋하얇다/sethajatha/a.真っ白い

以上のごとく、「日・太陽」を意味する中期朝鮮語「히」/hii/および現代朝鮮語「해」/hε/を認識する過程は、その属性や容態を基本に保ちながら分化し、意味の拡大現象を生じたことがわかる。それは、あたかも太陽を中心にしてあまたの星が巡り、自らの場を設定しているかのように、太陽を露出する語彙は「해-」/hε-/系および「새-」/se-/系に、あるいは接頭語「시-」/shi-/、「새-」/se-/などに分化した。これは、太陽を認識する朝鮮民族の思考性を気付かせてくれる。

ところで、現代朝鮮語で、固有語の数字「1」

gonbandzida/(生意気だ、差出がましい)の例語のように色彩に関係のない形容詞の接頭辞としても用いられる場合がある。

は「하나」/hana/、「1つの」は「한」/han/と発音される。また、同様に数字の「2」は「둘」/tu:l/であり、「2つの」は、「두」/tu:/と発音される。この発音から連想される語彙は固有語の「해」/hε/（日・太陽）と「달」/tal/（月）である。一方、古代の陰陽学では、日は陽であり、月は陰であることを明らかにしている。例えば、「易」という文字の語源を巡っての議論があるが<sup>(6)</sup>「易」の上部の「日」は「太陽」を、下部の「勿」は「月」を表し、「日」は陽を、「月」は陰を表す、という。

他方、古文献に『天符經』<sup>(7)</sup>が伝承されているが、新羅時代の崔致遠<sup>(8)</sup>が漢字81字で翻訳したものを記せば次の通りである。

#### 天符經

一始無始 一析三極 無盡本  
 天一一地一二人一三  
 一積十鉅 無匱化三  
 天二三地二三人二三 大三合  
 六生七八九運 三四成環  
 五七一妙衍 萬往萬來  
 用變不動本 本心本太陽  
 昂明人中天地一 一終無終 一

29年間に亘る研究成果の末、『天符經』の81

字を解釈した崔載忠氏によれば、「한」/han/は、広い意味領域を持つと同時に、我が民族を表象する概念である。「한」は国名と民族の言語を包括的に自称する共通分母である、という<sup>(9)</sup>。

ところで、『天符經』81字を見れば分かるように、数字に対する解釈が難解である。換言すれば、それがまた、『天符經』81字を解く鍵でもある。したがって、『天符經』を解読するためには、「数の本質」を知らなければならないことになる。いわば、『天符經』は、数でもってある意味を代替している經典だと言えるし、数は、その意味で単純な道具ではなく、事物と表裏一体をなし、經典として昇華するそれ自体の原理を持っている、と言えよう。ゆえに、「数」自体は、暗示性と圧縮性、法則性と予言性を帯びている、と言える。

それでは、本稿で扱っている色彩語の「白」を表象する一連の「화다」/hūda/と『天符經』に表われる数字「1」との間にどのような関連性があるのか、について考察してみよう。

今、その解答を導き出す前に、「한」/han/（1つの）の持つ概念について考察してみよう。まず初めに、「한」の多様性であるが、根源的には、数字の「1」、「1つの」が示すように、根源的実在を示し、時と空間を超越した萬法帰一の窮極的根源を意味する。

(6) 白川 『字統』、『説文解字詁林』、『説文新義』参照

(7) 『天符經』は天帝国である桓国から口傳耳受された經典である。桓雄天王が天符三人を以て神壇樹の下に降りて神市を開き、人間を弘益人間ならしめるために民を諭した時の調和の原理。即ち宇宙創造の理致を81字で解釈した真經である。1から10までの数字で天・地・人の三極を創り、生長肖病歿の5つの苦悩が無限に反復する経路を説破したものだ、と言う。初め、神誌・赫徳に命じて鹿図文字で記録させたが、後に崔致遠が再び漢字を以て記し後世に伝えられた。しかし、李氏朝鮮時代の儒教の影響で永く知られることがなく、

1916年に至って桂延壽が妙香山の石壁からこれを発見し、1917年に大宗教に伝えられるところとなった。(['한思想과民族宗教』一志社、56ページ参照)

(8) 崔致遠(858~?)は新羅末期の文人。字は孤雲、海雲。12歳の時に唐に渡り、874年に17歳で唐の科挙に及第して官途につく。在唐期の文集『桂苑筆耕』20巻をはじめ、詩賦や『崇福寺碑銘』『釈順応伝』等が伝わる。

(9) 崔載忠氏は、例語として、한나라/hannara/(大韓民国)、「한겨레」/hangjore/(韓民族)を挙げている。崔載忠『天符經・民族의 뿌리』71ページ参照

第2に、「한」は、古来、「大」と「多」を意味した。したがって、数字「한」(1つの)との関連で考察すれば、「한」は「多」の中の「1つ」であると言えようし、「한」は個性を帯びた普遍性を意味しているとも考えられる。

第3に、「한」は、中庸および中道の思想を象徴している。換言すれば、均衡と調和を意味している、と言える。例語を挙げれば次のとおりである。

한가운데/hanğaunde/ (真ん中)

한나절/hannad3ɔl/ (半日)

한복판/hanbokphan/ (真ん中)

한가위/hanğau/ (中秋) など。

第4に、「한」は、「하늘」/hanɪl/ (天・空)に通じることである。筆者は、「하늘」の語源を、通時的に「 $\text{하} + \text{을} > \text{한} + \text{을} > \text{하늘}$ 」/hen + el/ > han + ɔl/ > hanɪl/と推量する。現代朝鮮語でも、「한울」と言えば、「広さを持った空間」のことであり、「한얼」は「天国」の意である。「 $\text{을} > \text{얼}$ 」/ɛl > ɔl/は「魂」の意である。「하늘」は、古来、朝鮮民族にとって尊崇の対象であり、崇拝の心性とともに帰依するところであった。それは、朝鮮民族の天孫後裔の意識とも合致する。このことは、次のような慣用語表現にも窺い知ることができよう。

하늘같이 믿는다/hanɪlgachi minninda/ (天<空>のごとく信じる)

하늘이 두렵지 않느냐?/hanɪli turjɔptʃi anninja?/ (天<空>が怖くないのか?)

하늘이 무너져도 솟아날 구멍이 있다/hanɪli munɔd3ɔdo sosanar kumɔgi itta/ (天が崩れても甦る穴がある)

朝鮮民族にとって、「하늘」(天・空)は古来、

真理そのものであり、太虚であり、また宇宙の法則でもあった、と考えられる。それはまた、清潔で広大な聖者の心性であり、姿であることと相通じるものであった。

「天空」は、全ての天体物質を包容する存在の器であり、その中に存在する、生きとし生きる物の生命の母胎である。また、「天空」は空いているがゆえに、「 $\text{空}$ 」であり、実態が見えないがゆえに、「無」である。しかし、「天空」は生成と創造力によって「無」を克服することができ、「無」は「有」に通じ、また、「有」は「無」に通じることになる。そうして、「人」は、天からの賜物としてとらえ、死んでは天に帰る存在だ、と考えた。そのことは、「死ぬ」の尊敬語である「돌아가다」/tolağada/ (帰る、戻る)や「天命」「天壽」という語に象徴されている。ゆえに、朝鮮民族は、初めと終わりはそれぞれ天にあり、初めと終わりを1つに結びつける「円」と考えたのであろう。『三一神話』には、円は天、方は地、角は人を象徴する、とある。この場合の天・地・人を三才と称するが、15世紀半ばに創製された「訓民正音」<sup>(10)</sup>の母音字の原理はこの三才の原理によっていることは広く知られていることである。

第5に、「한」は「해」/hɛ/ (太陽)に相通じていることである。「해」を認識する過程で、太陽が「白」に関連し、「해-」系、「새-」系、あるいは接頭辞「시-/새-」系に分化し、太陽を認識する朝鮮民族の思考性については既述のとおりである。ここで、筆者は、「해」/hɛ/ (太陽・日)の起源を、「하」/ha/から生じたものだと考える。『天符經』においても、「本心本太陽」と記している。「해」(太陽)こそ光明正大な証拠であり象徴である。朝鮮民族

(10) 李氏朝鮮時代に国字を制定した時(1443年)、その文字に与えられた名称で、「民に訓える正しい音」

の意である。李朝第4代王世宗の御代に公布された。



は今も1年を「해」/hɛ/と言い、地球が太陽の周りを「한 바퀴 돈다」/han bakhui tonda/（ひと巡り回る→一巡する）と称する。また、太陽は、清く、明るいがゆえに、朝鮮民族は「해 맑다」/hɛmakta/（色が白く清々しい）と表現するのである。古来、「天地玄黄」と称し、空間は「暗」の象徴でもあった。「暗」から「明」への転換は、太陽の存在があつてのことである。

朝鮮民族は、古来より「白衣民族」と称され白衣を好んで着用した。「白色」の純粹性と、それが全ての色を包含することから「平和」を希求した、と言われている。

一方、「한」の古字転写とも考えられる、朝鮮民族の始祖、檀君神話の「桓因」/hwanin/、「桓雄」/hwanuŋ/、「桓儉」/hwangŋəm/の三神の頭文字「桓」/hwan/は、色彩の「白」の転写だ、と考えられる。

以上『天符經』81字の解説をもとに分析した結果、固有語の数詞「하나」/hana/(1)、およびその連体詞「한」/han/(1つの)の意義素は、(1)萬方帰一の究極的根源、(2)「多」の中の「1つ」の意、(3)「中庸」および「中道」の意、(4)「天・空」の意、(5)「해」/hɛ/(太陽)の意と相通じるものがある、との認識に達した。

そして、これらのことは語彙の派生法から考察する時、次のような類義語の中にも見い出すことができる。

a. 「현」/hɔ:n/が連体詞として用いられ「古い…」の意の場合。

- ① 현것 /hɔ:ngɔt/（古物、ふる）
- ② 현계집 /hɔ:ngjɛdʒip/（出戻りの女性）
- ③ 현쇠 /hɔ:nsɔi/（屑鉄）
- ④ 현신 짝 /hɔ:nsinttʃak/（履き古した靴）
- ⑤ 현옷 /hɔ:not/（古着）
- ⑥ 현짚신 /hɔ:ndʒipsin/（擦り切れて履けなくなった草靴）

- ⑦ 현책 /hɔ:ntʃɛk/（古本、古書）
- ⑧ 현책방 /hɔ:ntʃɛkpaŋ/（古本屋）

b. 「환」/hwa:n/に接尾辞「하다」/hada/が接続して単一の形容詞を形成し、「光明」の意となる場合。この場合、次の表現が可能である。なお、⑦の例語は副詞である。

- ① 달빛이 환하다 /talbithʃi hwa:nhada/（月光が明るい）
- ② 대낮같이 환한 밤 /tenatkatʃi hwa:nhan pam/（真昼のように明るい夜）
- ③ 전등이 환하게 비치다 /tʃɔndŋi hwa:nhaŋge bithʃida/（電灯が明るく照らす）
- ④ 정치에 환한 사람 /tʃɔŋthʃie hwa:nhan sa:ram/（政治に明るい人）
- ⑤ 앞이 환하게 트인 집 /aphi hwa:nhaŋge tʃin dʒip/（前がぱっと開けている家）
- ⑥ 얼굴이 환하다 /ɔlguli hwa:nhada/（眉目秀麗だ）
- ⑦ 환히 /hwa:nhi/（明るく、はっきり、広々と）。

c. 「흔」/hɪn/に接尾辞「하다」/hada/が接続して単一の形容詞を形成して「多」の意となる場合。この場合、次の表現が可能である。

- ① 흔한 병 /hɪnhan bjɔŋ/（ありふれた病気）
- ② 흔한 책 /hɪnhan thʃɛk/（ありふれた本）
- ③ 돈이 흔하다 /to:ni hɪnhada/（金がありあまっている）

副詞形「흔히」/hɪnhi/（ありふれて）の例語としては次のような表現が可能である。

- ④ 젊은이들이 흔히 범하기 쉬운 과실이다 /tʃɔlmɪnidili hɪnhi pɔmhaŋi swiun kwasilida/（若者がよく犯しやすい過ちだ）
- ⑤ 흔히 세상에 있는 일이다 /hɪnhi sesaŋe innɪn ilida/（よく世間にある事だ）。

d. 「흰」/hɪn/が連体詞として用いられ「白」

の意を表す場合。これは、形容詞「하얗다」/hūda/ (白い) の転成であろう。

- ① 흰깨 / hūinkkε / (白胡麻)
- ② 흰나비 / hūinnabi / (白い蝶)
- ③ 흰떡 / hūinttok / (白餅)
- ④ 흰매 / hūinmε / (白鷹)
- ⑤ 흰머리 / hūinmori / (白髪)
- ⑥ 흰모래 / hūinmore / (白砂)
- ⑦ 흰모시 / hūinmoshi / (白苧)
- ⑧ 흰바곳 / hūinbagot / (白附子)
- ⑨ 흰밥 / hūibap / (白飯)
- ⑩ 흰산호 / hūinsanho / (白珊瑚)
- ⑪ 흰소리 / hūinsori / (自慢話, 大きな話)
- ⑫ 흰숨털 / hūinsomthol / (白い産毛)
- ⑬ 흰쭈 / hūinssuk / (白ヨモギ)
- ⑭ 흰신 / hūinshin / (白い靴)
- ⑮ 흰엿 / hūinjot / (白い飴)
- ⑯ 흰옷 / hūinot / (白衣, 染色していない服)
- ⑰ 흰자위 / hūindzawi / (卵の白身)
- ⑱ 흰죽 / hūindzuk / (白粥, 白米の粥)
- ⑲ 흰토끼 / hūinthokki / (白兎)
- ⑳ 흰밭 / hūinbat / (白小豆)

ところで、色彩は物理的には光によって起こされるものであることは明らかである。しかし、色彩を規定する属性は色相と明度と彩度であることも我々の知っていることである。しかしながら、色彩の感覚は全ての人に同じであり、同じ人について同じ条件の刺激がある時、同様に感じるか、というとは必ずしもそうではないらしい。ある色彩の感覚が他の色彩の存在によって平常の条件の時と異なって感じられる現象(対比現象)がある、と言う。

色彩に伴う感情は多く連想に結びつくもので、

(11) 『統一日報』1993年7月6日付記事(文化欄)参照

太古からの経験の蓄積が自然に他の感情を誘引するようになる場合が多い。これについては民族性、風土性、地域性などからの考察が要求されよう。

白色は、一般に、明るい色、純粋を表示する色と考えられ、認識されている。数年前、韓国のある放送局が行った世論調査でも、白色は韓国と韓国民の国民性を象徴し<sup>(11)</sup>、先祖伝来の民族性を表現する色として最も多く選ばれた。白衣民族という言葉の表現で知られるように、我が民族が白い色彩を尊び、生活してきたのは伝統文化の所産である。

### 3. 日本民族の「白」に対する認識

日本語の歴史において、特に古代の上代語では色名に関する語は大部分が染色の材料(染草)の名に由来する、と言われている。染色と無関係の色名としては、赤(アカ)・青(アヲ)・白(シロ)・黒(クロ)の4種しかない。そして、これらは明・漠・顕・暗という光の系列を基本とするもので、おのおのが色としての認識なのか光としての認識なのか識別できないものが多い、と言う<sup>(12)</sup>。

以下、『時代別国語大辞典・上代編』を参考に、「白」に関連する語彙を考察してみよう。

まず、「白(シラ)」を調べると、白(シロ)の交替と記され、「しらか」(白髪)、「しらく」(白くなる)、「しらくも」(白い雲)、「しらたま」(白い玉)、「しらつつじ」(白い花の咲くつつじ)、「しらつゆ」(白い露)、「しらとり」(白い鳥)、「しらなみ」(白く立つ波)、「しらに」(白い顔料に用いる土)などが例語として記載されている。これらは「白(しら)」が名詞の上に

(12) 『時代別国語大事典・上代編』三省堂, 107ページ参照



付いて複合語を形成しているのが特徴である。

次に「白(シロ)」を調べると、同様に、シロも複合語を形成し、「しろかね」(銀)、「しろかみ」(しらが)、「しろき」(神に供える白い濁り酒)、「しろぎぬ」(白い衣を着た人)、「しろたへ」(栲の布)、「しろとり」(白鳥)などの例語と、「しろし」(白い)の形容詞が見られる。形容詞「しろし」は「しるし」の意であり、著しい、明瞭である、意と関係のある語であろう。また、「す」の項に、「す」が接頭語として、飾らない、そのままの、はだかの意として上代語にも散見できる。また、いつの時代かは定かでないが、「白(しら)」の「ーら」、「白(しろ)」の「ーろ」は接尾辞として後続したものであることが知れよう。すると、朝鮮語の「白」を表す「하얀」/hūda/、および「太陽」を表す「해」/hɛ/との関係および、言語学上の/h/音と/s/音の交替現象を考慮する時、語源学上、朝鮮語と日本語は濃厚となる。

上代語における「日(ひ)」は、太陽・日光の意である。また、太陽の神格化として天照大神のこと、太陽の照らしている時間、時間の単位としての日および一日をも意味した。「ひかり」(光、光るもの、輝くこと)も「ひかる」(光る、輝く、発光する)も第1音素の「ひー」/hi-/は「太陽・日」の意であろう。「火」(ひ)の音価が万葉仮名表記で乙類であるのに比して「日」と「光」の「ひ」は甲類で一致する。同様に、「ひかた」(日方)は、風位の名と解されているが、太陽のある方向から吹く風と解釈するのが妥当であろう。「ひつき」(日月・太陽と月)、「ひつぎ」(日嗣、天皇の位)、「ひでり」(日照り)の「ひ」も日(太陽)に解釈できる。

「ひのものと」は、古文獻で「日本之大和の国の鎮ともいいます神かも」(万319)、「日本乃倭の国は言玉の富ふ国とぞ」(続後紀嘉祥二年)

とあるが、ヤマト(大和・倭)の国にかかる枕詞として文字どおり、「日の本の」であろう。

以上、概観したように、「白」が太陽の名称と同根関係であるのは朝鮮語の場合と日本語の場合もおなじであることが判明する。ただ朝鮮語の「하>해」/hɛ>hɛ/が「太陽・日・1年」の意を包含するのに対して、日本語の「日」/hi/は、「太陽・昼・1日」の意を含んでいる点異なる。つまり、朝鮮語の場合は、地球が自転しながら1年かけて太陽の周りを巡る認識を持っていたのに対し、日本語の場合は、1年を365日に分けた区分としてとらえ、地球が1日に1回自転する時間と認識したことが知れよう。なお、日本語「日」/hi/に「昼」(ひる)の意があるのは、日の出から日没までの間の明るい時間帯を指し、「昼」は「日」からの派生語であろう。1年の周期も1日の周期も太陽の運行に基づくものであるから太陽の名称が基本になっている点は両言語とも共通している。

#### 4. おわりに

日本語の形容詞の大部分は、その根本が名詞か動詞から派生したものであることはこれまでの諸学者によって解明されてきた。

本稿では、既述のとおり色彩語の「白」を巡っての語源の追求と派生語の様相を考察してきたが、紙面の関係上、詳細に述べられなかった点がある。それは、「色彩語」と「光」に関わる表現が日朝両言語においてそれぞれ同根派生語関係にある、ということである。

日本語の場合、名詞「あか(赤)」と形容詞「あかるし(明)」、名詞「くろ(黒)」と形容詞「くらし(暗)」、名詞「あを(青)」と形容詞「あはし(淡)」、名詞「しろ(白)」と形容

詞「いちしるし・いちしろし」<sup>(13)</sup>(灼然・顕著)がそれぞれ同根派生語関係にある。

一方、朝鮮語の場合は、日本語の場合と異なり、色彩語の名詞の形成に限って言えば、下記のとおり形容詞からの派生語に因っている。

- 검다/kɔmta/ : 검정/kɔmdʒɔŋ/ (黒)  
 희다/hīda/ : 하얗/hajaŋ/ (白)  
 하얗다/hajatha/ : 하얗/hajaŋ/ (白)  
 밝다/pakta/ : 발강/palgəŋ/ (赤)  
 벌겍다/pɔlgətha/ : 벌겍/pɔlgɔŋ/ (赤)  
 발겍다/palgatha/ : 발강/palgəŋ/ (赤)  
 누르다/nurida/ : 누렇/nurɔŋ/ (黄)  
 노르다/norida/ : 노랑/noraŋ/ (黄)  
 누렇다/nurətha/ : 누렇/nurɔŋ/ (黄)  
 노랗다/noratha/ : 노랑/noraŋ/ (黄)  
 푸르다/phurida/ : 퍼렇/phɔrɔŋ/ (青)  
 파랗다/pharatha/ : 파랑/pharaŋ/ (青)  
 퍼렇다/phɔrətha/ : 퍼렇/phɔrɔŋ/ (青)

朝鮮民族は可能な限り感情を遠ざけ、争いを避けて人格と規範を重視する傾向があり、特に、国教として取り入れられた儒教が隆盛した李朝時代には顕著であった。

それには、白色以外の色彩は欲望と同一視されてきたことが考えられる。文武の官吏たちも王宮では品階に応じたそれぞれの色彩の官服を着用したが、いったん自宅に帰ると白衣に着替えたのもそのような観念によるものであろう。

他の1つには、自然に同化し、帰依するという心性とも関係があろう、と思われる。「白」は染められないありのままの原色であり、自然そのものと認識されたのであろう。自然に逆らうことなく、道理に順って生きることが正しい人生と考えてきたのであろう。

末尾乍ら、本稿は1994年6月8日、「経法学会」にて発表されたものであることを付記しておく。

#### 〈参考文献〉

- 1) 『韓国文化象徴事典』東亜出版社、1992年
- 2) 『名著で見る朝鮮文化史』新東洋出版社、1992年
- 3) 伊原昭『文学にみる日本の色』朝日選書493、1994年
- 4) 吉村貞司『原初の太陽神と固有暦』六興出版、1981年
- 5) 大岡信『日本の色』朝日新聞社、1979年
- 6) 星野昌一『色彩調和と配色』丸善株式会社、1972年
- 7) 塚田敢『色彩の美学』紀伊国屋書店、1979年
- 8) 岩井寛『色と形の深層心理』日本放送出版協会、1986年
- 9) 千々岩英彰『色彩学』福村出版、1991年
- 10) 上代語辞典編修委員会『時代別国語大辞典 上代編』三省堂、1967年
- 11) 稲村耕雄『色彩論』岩波新書、岩波書店、1959年
- 12) 高麗大学校民族文化研究所『韓国文化史大系1；民族・国家史』東亜出版社、1964年
- 13) 崔載忠『天符經・民族의 뿌리』한민족、1986年
- 14) 朴容淑『韓国陰陽思想의 美学』일월서각、1981年
- 15) 安田吉実・孫洛範『民衆의 生活 韓日辞典』民衆書林、1983年

(13) 「いちしるし」(著)の「いち」は、「いとー、いたー、いつー」の交替形をなす接頭辞で「しろし」

(白)「しるし」(顕)を副詞的に修飾している。